岩槻新校準備委員会（第３回）　議事録

１　日　時　　令和５年１１月２７日（月）　　午前１０時開会
　　午前１１時３０分終了

２　会　場　　県立岩槻高等学校会議室

３　出席委員　　依田委員長、関根副委員長、長谷川副委員長、石井委員、田中委員、
　　渋谷委員、亀井委員、手島委員、池田委員、廣川委員

４　事務局　　魅力ある高校づくり課　栗藤、中島、坂本、髙辻、橋本

５　協　議　　「岩槻新校（仮称）基本計画（案）」について

依田委員長　それでは次第２、協議に入ります。まず、協議に当たって事務局から資料の概要について説明をお願いします。

事務局　（資料の概要について説明）

依田委員長　資料の概要について説明がありましたが、よろしいでしょうか。それでは、【資料１】岩槻新校（仮称）基本計画（案）について、事務局から説明をお願いします。

事務局　（岩槻新校（仮称）基本計画（案）について説明）

依田委員長　事務局から説明がございましたが、いかがいたしましょうか。とりあえず皆様から御質問、御意見をまず伺ってまいりたいと思います。何かございますでしょうか。よろしいでしょうか。はい。それでは少し区切って、皆様から御意見、御質問をいただきたいと思います。資料１と参考資料１を御覧いただき、見比べながら進めていきたいと思いますが、まずは資料１の１ページ、１　策定に当たっての基本姿勢と２　基本的枠組み、枠組みについては今、事務局から説明がありましたように、学科名と学級数なども入っております。こちらについては前回、御意見をいただきまして学科名などを修正しております。いかがでしょうか。はい。事務局からお願いします。

事務局　修正の経緯について、少しだけ補足させていただきます。当初は国際探究科ということで検討いただいたところですが、主に教職員から成る新校基本計画検討委員会の中で、探究という言葉が分かりにくいのではないか、英語表現がしっくりこない、国際に関する学科だけに探究という言葉が入ると普通科には探究活動がないと誤解を招くのではないか、こういった意見などがありました。そして、検討委員会の中で、具体的な代案として国際教養科が出されておりました。そういったことを踏まえて事務局でも検討し、前回の準備委員会での御意見も踏まえ、いろいろ具体なアイデアも出されていましたが、国際教養科という形でいったらどうだろう

かということで第３回目の基本計画検討委員会の中では承認されて今日に至っているということでございます。

依田委員長　よろしいでしょうか。はい。では、資料１の２ページにまいりたいと思います。３ 校名ですが、これについては、今年度は協議をする予定にはなっておりません。来年度、皆様に御意見をいただきたいと考えております。そのことをここに記載しておりますが、校名について、何かございますでしょうか。よろしいでしょうか。では、校名については引き続き来年度に御意見をいただきたいということで、先に進みたいと思います。４ 基本理念と５ 教育活動等の基本方針でございます。これも事務局から説明がありましたとおり、キャリアパスという言葉を変えたなど、数点の変更がございましたが、その他の部分も含めて、御意見はありますでしょうか。はい。田中委員、お願いします。

田中委員　細かいところですが、４ 基本理念の⑴目指す学校のアに、地域の伝統産業等を生かしたとありますが、この生かしたについて、漢字が「活」ではないということに何か理由はあるのでしょうか。

依田委員長　事務局、いかがでしょうか。

事務局　他の箇所も場合によってはそういった漢字の使い方について、疑問に思うところが出てくるかもしれませんが、ここにつきましては、埼玉県の公用文の使い方に倣っているところです。もちろん、意味としては「活」ということも当然あり得るのですが、埼玉県の公用文では、この生きるという方の字を使うことになっております。

依田委員長　役所の慣例みたいなものでしょうかね。

田中委員　分かりました。

依田委員長　その他、いかがでしょうか。５番の基本方針の方も含めていかがでしょうか。はい。それでは、３ページを御覧ください。生徒指導、進路指導、生徒募集の三つをまとめて御覧いただければと思います。基本方針の中のものではございますが、それぞれいかがでしょうか。こちらも事務局から説明がありましたように、ルーブリックなど難しい言葉を分かりやすい言葉に直したり、前回はＳＤＧｓについてのお話などもいただきました。そうしたところも事務局で少し表現を工夫しているかと思います。生徒指導についても、岩槻北陵高校の取組などを踏まえて表現を少々改めたところでございます。よろしいでしょうか。生徒募集につきましても、前回、様々な御意見をいただきまして、募集学級数なども含めて生徒募集に更に力を入れていきたいという趣旨も含めて、表現の方を改めたところでございます。はい。廣川委員、お願いします。

廣川委員　今、皆さんいろいろとお考えいただいているところかと思いますので、一つ、全体を通してということになるかと思いますが、両校を再編して統合して新校になるというところもありますので、岩槻北陵高校もそうですし各校のレガシーみたいなところはどういうところに反映されているのかという点について、事務局から説明いただけると有り難いと思います。

依田委員長　事務局からよろしいでしょうか。

事務局　事務局として両校の統合を考えていく際には、これはどこの新校も同じですが、校舎を閉じる方の学校の良いところ、素晴らしい実践、素晴らしい教育、こういったものをレガシーとして引き継ぎたいと常に考えているところです。文言にすると、例えば、生徒指導の基本方針ア、イ、ウなどにはそういった部分が大いに出ているのかと思いますけれども、私たちが考えているところの岩槻北陵高校の特長は、学び直しでつまずきを解消する、一人一人に応じた進路指導による進路実現、生徒相談体制が非常に充実しているところ、こうしたところなんだと思います。平たく言いますと、先生方がみんな同じように生徒一人一人にしっかり向き合って寄り添い、つまずきのあった生徒も含め、３年間を通した丁寧な指導で生徒全員の進路実現を目指してきたところが素晴らしいところだと思います。ハードウェア的なものを何かレガシーとしてと考えることもあるかと思いますが、教育の場合は中身、ソフト面になるかと思います。そうした岩槻北陵の素晴らしい教育というものを、新校でもその精神と言いますか、その考え方、教員の生徒に対する向き合い方、そうしたところをしっかり引き継ぎたいと考えております。他にも、進路指導の基本方針イでも、先ほど申し上げたようなことも踏まえて、生徒一人一人の進路希望に応じたきめ細かな指導という言葉が入っていたり、また、教科指導の具現化ウに生徒にとって「わかる・できる」授業を展開する、生徒指導の具現化アに失敗を恐れずに主体的に行動できるよう配慮した指導、進路指導の具現化ウに多様な進路実現に向けた学習に結び付ける指導など、これまでの岩槻北陵高校の取組が言葉としても表現できていたら良いなと思い、このような記載にしております。

依田委員長　よろしいでしょうか。その他、いかがでしょうか。

関根副委員長　意見ではなく質問です。２ページの５　教育活動等の基本方針⑴基本姿勢については、前回の基本計画検討委員会でも準備委員会でも特に御意見が出ていなかったところ、他の新校と表現を揃えるということで、探究的な学習等を通じ、地域をはじめ多様な他者との協働的なと修正されていますが、この多様な他者については具体的にどういったことを想定しているのでしょうか。私が教職員に説明するときに、これについてのイメージをもしかしたら質問されるかもしれないと思いましたので、何かこういったことかなというものがあれば教えていただければと思います。

事務局　実はこちらの指摘をいただいたのは、この岩槻新校と同じように国際に関する学科を設置しようとしている和光新校の委員会の中でした。こちらの岩槻地区もそうですが、和光市でも外国につながる生徒がたくさんいたり、そういった意味で、最近の言葉だと多様性と言うのでしょうか、ダイバーシティなどそういったところを意識した意味合いということがあるのだと思います。また、エリアによっては違う観点での御意見をいただくこともあるかもしれませんが、たまたまそうした国際に関する学科に絡んで、外国につながる生徒や家族が地域にいたりすることを踏まえるとうケースがありまして、これを、地域にいらっしゃる多様な皆さんとのつながりということで、こういった表現にしております。事務局としては他にも、例えば多様性の中には、特別支援教育の発想もあるでしょうし、いろいろなものが含ま

れるのではないかということで、こうした表現にさせていただきました。

依田委員長　いわゆる地域外であっても、という意味合いでしょうか。地域外の支援団体とのつながりもあり得るだろうという趣旨ですかね。

事務局　高校の場合、地域というのが、単に隣接している、地理的な空間ですぐそばという意味以外にも、距離を超えて離れている皆さんとつながるケース、ステークホルダーの方がたくさんいらっしゃいますので、そういった多様な他者という意味合いで書かせていただいております。

依田委員長　はい。他にいかがでしょうか。前回の協議の中では、多様性や、選抜基準についても御意見をいただいたかと思います。その他の項目にも、外国につながるという表現があったかと思いますが、そういった外国につながる生徒の募集というのは、今はどういう感じで捉えられているのでしょうか。

事務局　例えば現在の岩槻高校では、外国人特別選抜という枠を設けて、一般の中学生とは別建ての入学者選抜を実施しています。埼玉県内で外国につながる生徒が増えてくる中で、同じ埼玉県で学ぶ人たちに、高校への入学の機会をどう提供していくかという中で、様々なやり方があります。現行の入学者選抜のルールの中で行われているのは、今、申し上げた外国人特別選抜ということになります。それとは別に、今、埼玉県内では、先月プレスリリースがあったので委員の皆様も御存じかもしれませんが、令和９年度入学者選抜に向けて、入試の改善について検討が進められています。２週間くらい前まで県民コメントが行われていましたが、それが戻ってきましたので、それを踏まえてこの先の入学者選抜をどのような形にするかということが検討されていくのだと思います。その中には、こういった県内の外国につながる生徒が増えてきている状況なども踏まえて検討が行われていると思いますが、最終的には現行の入学者選抜に少し手を入れるような具体的な変更がなされるという方向で議論が進んでいるところです。直接的にこの令和９年度入学者選抜の中で外国につながる生徒の取扱いが大きく変わるのかどうかというところで言うと、恐らく今と同じ制度を維持するのかと思いますが、検討の中には入ってきている話題かと思います。

長谷川副委員長　岩槻北陵高校の長谷川です。この素案の中に、いろいろ岩槻北陵高校の良いところを入れていただいて、本当にどうもありがとうございます。外国籍の生徒のことで言えば、今、本校で言うとざっくりと５％くらいが外国籍の生徒です。先ほどおっしゃっていました外国人特別選抜みたいなものを、できれば、入試システムが変わりながら有効に活用して導入していただけると、より岩槻北陵高校で今やっているような教育が引き継いでいただけるのかなと思いますので、前向きに検討していただければと思います。

関根副委員長　外国人特別選抜につきまして、補足させていただきます。外国人特別選抜は、実際に２人とか３人とか枠があるわけではなく、入試制度が少し違います。５教科ではなく英語と数学と面接ということになっておりまして、それに対する評価で、５教科で受けてくる他の一般の生徒たちと、うまく校内で持っている評価の中で合否を決めるというシステムです。他県、特に東京都は枠を設けていますが、

埼玉県は設けていませんので、外国人特別選抜に願書を出した中学生が必ずしも合格するわけではないということです。これについては新校とは別に切り離して、岩槻高校自体で、来年度については評価の方法を変えないと、このままだとなかなかハードルが高いのではないかということで、今、議論を進めているところです。埼玉県の方で、令和９年度入学者選抜でその辺をどう変えるかということに関しては、全く私には分かりませんが、増えている外国につながる生徒を、新校に向けてどんどん来てもらえるような方向性というのであれば、そういったことも踏まえて、来年度以降に具体的な検討が必要かと考えています。繰り返しになりますが、枠があるわけではないので、必ずしも全員が受かるということではなく、もしかしたら 10 人が受検して 10 人が不合格という可能性もあるということだけ、御理解いただければと思います。

依田委員長　これについては、新校基本計画検討委員会の委員にもお伝えいただいて、来年度に向けて、具体化する中でまた検討を進めていっていただければと思います。それでは、３ページの⑸生徒募集までのところですが、よろしいでしょうか。はい。それではその下ですが、６　教育活動等の基本方針の具現化のところ、⑴教科指導、４ページにいって⑵生徒指導、⑶進路指導、⑷生徒募集、５ページの⑸その他までつながりますが、今の基本方針を受けての具現化の部分です。こちらについて、皆様から御意見等はございますでしょうか。

渋谷委員　商工会議所の議員として参加しております渋谷です。生徒募集に関わることかと思いますが、参考資料１の１ページ目、修正案に関連する御意見の要旨ということで、●が付いているのでこの準備委員会で出た御意見だと思います。岩槻高校に国際文化科が設置された当初は２クラス。最初は生徒が集まったが、その後なかなか人が集まらなくなり、一時期、国際文化科も全て普通科にしようと議論したこともあったようだという御意見がこの場で出たということで間違いないかと思いますが、いろいろな理由が複合的に混ざり合って生徒が集まらなかったということがあろうかと思いますが、１個か２個か、何か具体的な理由が明確なものとしてあれば教えていただきたいと思います。生徒募集に関わることなので、もしその具体的な理由が分かれば、今のうちに手を打っておいた方が良いのかなと感じております。

依田委員長　では事務局からでよろしいでしょうか。

事務局　資料にございますように、この委員会でそういった御意見があったのですが、事務局としては、これまでのという観点もあるのですが、現状の埼玉県では、中学生たちが普通科を志向している状況があります。岩槻区内でも普通科を志望する中学生が非常に多いことを考えますと、国際教養科という案をお示ししておりますが、その国際教養科を１クラスにするのか２クラスにするのかということと併せて、普通科を６クラスにするのか７クラスにするのか、検討する必要がありました。岩槻高校の既存の施設・設備を活用するとなると、キャパシティとしては８クラスが限界なので、８を７：１にするのか６：２にするのかという議論ですが、国際教養科を増やすと普通科を削らなければならない状況になる中で、普通科のニーズを考え

て、私どもとしては７：１なのかなというところになっております。こちらの委員会で出されたときには、過去の経緯のようなことを参考にお示しいただいたのかなと考えております。

関根副委員長　渋谷委員の御指摘はすごく鋭いと思っております。岩槻高校の歴史の中で国際文化科を設置した当時は２クラスあって、もちろん埼玉県内の生徒数が多かったということもありましたし、目新しさもあったのかなと思います。将来英語を使った仕事に就きたい、英語に関することを学んでいきたいという生徒が一定数いた時期については、２クラスあったということです。その後、中学３年生の段階で英語を中心に学びたいという子というのは、英語が得意な子、そして英語がしゃべれるようになりたいという子も含めて、女子生徒が非常に多い傾向にあります。男子生徒は普通科を志望する傾向がある中で、徐々に英語関係、外国語関係、コースも含めて志望者が減ってしまい、その流れで岩槻高校は２クラスから１クラスにしたということを聞いています。私がすごく懸念するのは、現在でも英語を主とした科を持っている学校は、結構、生徒募集で苦労しています。実際、国際文化科は、御蔭様でこの前の進路希望状況調査ではそこそこの人数が第一希望にしてくれてはいますが、ここ数年間、倍率が1.0倍に満たなくて、普通科が第一志望で、第二志望で来た子たちが入学してくる状況であったようです。これは一概には言えない私の感覚ですが、県内で、理数科を希望する子たちは、理系という大枠の中で、数学やりたいとか化学をやりたいとか、いろいろなことをやりたいという子たちが集まるので、バランスが取れますが、英語というのはそれに特化してしまっているので、英語でこんなことやりたいという具体的な希望を持って意欲がある子たちというのは、中学校３年生の段階ではそこまで多くないという状況かと思います。だったらまずは普通科が良いと。これは３年生と面談していてもよく聞きますが、そういった回答をする子たちが非常に多い状況でした。そういった流れなども踏まえて、獨協大学の田中委員もいらっしゃいますので、大学の方にもそういった関係の影響があるのか、また、大学側から見た外国語科を希望する生徒たちの動向などがあれば、参考までにお聞かせいただければ有り難いと思っています。渋谷委員の御質問にどこまでお答えできたか分かりませんが、国際文化科を持っている岩槻高校の校長としては、そういった感触を持っています。

依田委員長　渋谷委員、いかがでしょうか。

渋谷委員　よく分かりました、ありがとうございます。子供たちがまだ高校に入る時点では進路が明確でないから、とりあえずという言い方が適切かどうか分かりませんが、普通科にという感覚なのかなと。ということは、逆にチャンスかなと思います。今は他校でも苦労しているというお話だったので、この岩槻新校は募集人員がいっぱいになってしまってクラス数を増やさないといけないくらいになるような仕組み作りをしていく必要があるかと思います。田中委員の獨協大学は外国語学部が有名ですので、外国語を学ぶなら獨協大学という生徒もいます。私も獨協大学の付属の高校に行っていましたが、同級生も、外国語を学ぶなら獨協大学ということで、獨協大学に結構行っていました。チャンスと捉えて、魅力ある、募集しやすい

仕組みを作ったらいかがかと思いました。

田中委員　大学側のことを少しお話しさせていただきます。本学に限らず大学入試の業界において、外国語系とか国際系は今、正直不人気という状況です。少し低迷していると言いますか、やはり志望者が減っているというのは事実です。ただ、業界的には、４、５年すれば少し上昇に向かうのではないかと言われておりまして、この先４、５年で再び浮上してくるであろう外国語系、国際系でいかに魅力ある学部、学科、あるいはカリキュラムを作るかということを今、考えています。特に本学の場合は、学則の第１条で外国語教育を重視するとうたっておりますので、外国語教育をやめるという選択肢はあり得ないですが、それでも、昔ながらの外国語教育を全て捨てる必要はないと思いますが、ＡＩなど新しいこともいろいろあると思います。特に今の学生は、ＡＩがあったり様々なインターネット上の翻訳ツールがあるので、外国語を学ぶ意義がどこにあるのかと言う人もいるので、そういった意見も踏まえて、外国語教育を更に新しいものに変えていく必要があるだろうと考えています。それに合わせて学部再編であったりカリキュラム改訂などをする必要もあるだろう、それを早急にやる必要があるだろうと考えているところです。

依田委員長　はい。ありがとうございます。この件につきまして、関連して他の委員から何かありますか。先ほど、関根副委員長と渋谷委員との間で、中学校の段階ではなかなか普通科志向が、という話がありましたが、その辺、亀井委員から、中学校の現状として何かお話いただけるようなことがあればお願いしたいのですが。

亀井委員　本校の生徒は１学年 100 人前後ですが、私がイメージする中では、パッと、この子は外国語の方で力を伸ばしていきたいんだろうな、もしかしたらその系統の高校を選択するだろうなという子は、やはり限られている気がします。私が思いつく中では 100 分の２くらいでしょうか。更に、三者面談もやっておりますが、本人の興味関心があるのは外国語である、もしくは工業系や体育系など、そういった思いはあるのですが、年齢的なものもあるかもしれませんが、最終的には保護者の意見等で、可能性を今の段階で絞る必要はないのではないかといったような方向に持っていく面談が結構あります。中学校としては、進路指導、キャリア教育という意味では少し残念な部分として感じてはおりますが、本人の気持ちプラス保護者の意向で、なんとなく普通科という傾向があるような気がしています。ただ、委員の皆さんがおっしゃるように、今後の日本を支えていく子供たちを育てていくという思い、これは中学校も同じですが、そういった意味では、やはり生徒一人一人の個性を大事にという方向に少しずつでもシフトしていく必要があると思っています。ですので、渋谷委員がおっしゃるように、岩槻新校の特色として国際教養の方に力を入れていくというのは、私も賛成です。

依田委員長　ありがとうございます。普通科の特色化が求められている現状において、国際教養科があることで、普通科の学びにも何か影響があると捉えても良いのか、事務局に確認です。

事務局　普通科に専門の学科が併置されている学校は、必ずその専門の学科の特長、良さがにじみ出てくるものだと考えています。現にこの岩槻高校も、他の学校が外

国語科という名称を与えているのに対し、こちらは国際文化科ということで、実を言うとその取組というのが、私たちが考えていた国際に関する学びにかなり近いものがあります。語学力、英語力、その他の言語の力をツールとして、様々な外国の文化や事情に精通していけるような教養を身に付けていくということがあります。そういった学科が置かれていると、そういったことを教えるための質の高い教員が集まってくる形になります。その影響が他の普通科の生徒たちにも出てくると思いますし、また、国際文化科を中心に行っている海外や国際文化を学ぶような機会も、普通科の方にも、恐らく学校の中では、海外短期留学といった場合には国際文化科の生徒だけでなく普通科の生徒たちにも同じように募集をかけているはずです。そういったように、専門学科が持っている様々な特長的な学びが普通科の方にも必ずにじみ出てくるものです。これが併置をしている強みだと思います。ですので、私たちもそういったことで、クラス数については議論が分かれるところではありましたが、国際教養科という学科をこの学校の大きな特色として、普通科も国際色豊かな普通科になっていくだろうと期待しているところです。

依田委員長　はい。渋谷委員、お願いします。

渋谷委員　今、事務局から説明があったことは、まさにそのとおりだと思います。英語とかドイツ語とかフランス語というのはツールでしかないんですね。なので、国際教養科で英語を学ぶというのは当たり前のことで、その先に何かあるのかということを子供たちに示す。例えばですが、海外の方と仕事をするとか海外の方と協力して何かを作るとか、そういったことをするには、やはり英語やドイツ語やフランス語が必要なんですね。ですので、国際教養科が英語を学ぶ場所というのは当たり前ということで、その先にこういった楽しみがあるよ、国際交流ができるよ、スムーズにできるよということを子供たちに示すのがよろしいのかと感じたところです。

依田委員長　これは御意見としてしっかり受け止めていただきたいと思います。それでは先に進めてまいりたいと思います。５ページを御覧ください。７　開校準備のところですが、これについては先ほど事務局からも話がありましたように、施設・設備の予算措置についてしっかり努力していくということ、あとは、新校開校後の様々な書類の発行などについて。生徒募集につきましては、今渋谷委員からもありましたように、しっかり力を入れていく、岩槻北陵高校の協力をいただくということを記載しています。校章、校歌、制服について、事務局に確認です。対象校が検討するとなっておりますが、これは開校後ということですか。

事務局　来年度立ち上がる新校開設委員会の中で、来年度、再来年度の２か年にかけて、開校までに検討すべきことが書かれております。

依田委員長　はい。それでは、７　開校準備について委員の皆様から何かございますでしょうか。はい。田中委員、お願いします。

田中委員　先ほどの渋谷委員の意見に付け加えと、そしてあえて渋谷委員の意見に反論ではないですが言わせていただきます。国際教養科の存在意義をはっきり示すことが大事ではないかと思っています。先ほどおっしゃっていただいたように、外国

語はツールに過ぎないというのはそのとおりだと思いますし、外国語を学ぶことによって様々な国際交流、海外の人とのやりとりがスムーズになるというはそのとおりだと思います。一方で、私は本学のフランス語学科に属しておりますが、フランス語学科の卒業生のうち、就職してフランス語を使う人がどれくらいいるかというと、１％もいないんですね。ほとんどの人は使わないという現実があって、それは日常生活を見渡しても、フランス人がそんなにいるわけではないし、フランス語を使っている日常生活の中の物事がそんなにあるわけではありません。そうすると、フランス語学科に入る意義はどこにあるかということになってしまうわけで、その答えの一つは、フランス語を学ぶということはフランス語を話している地域、国について学ぶことであって、例えばその考え方についても、我々日本人とフランス人の考え方はかなり違うところがありますので、そういう全く違う考え方を知ることによって、フランス語そのものは使わないかもしれませんが、考え方を新しく身に付けることで視野を広げ、社会に出たときに役立つのではないかという考え方を我々はしており、そういう広報をしています。ですから、国際教養科に入るとどういうことがあるのか、どういう学びがあってそれがその先の一人一人の進路にどうつながっていくかというアピールが重要だと思います。先ほどもありましたが、大学でも、特定の範囲のことが深く学べるよりも、幅広く浅くの方が今は人気があります。高校で普通科に人気があるのと同じで、大学でも幅広い方が、例えば、フランス哲学を学びたいという学生はほぼいません。恐らく何百人に一人といったくらいかと思います。なんとなくふわっと大学に来ましたという人も増えてきてしまっている状況です。一方で、特定のことを学びたいという明確な意思を持っている人の方が、単純なことを言うと、就職活動がうまくいきますし、やはり輝いているし、学生生活が豊かだと思います。挑戦という言葉を使っておられましたが、挑戦を促すような広報の仕方というのも考えていけたら良いと思いました。

依田委員長　はい。先ほどの渋谷委員の御意見と合わせて、大変重要な御指摘かと思います。私はフランス現代哲学がブームのときに学生だったので、今はそうなんですね。事務局は受け止めて、今の考え方を踏まえてこれから具体の検討を進めていっていただければと思います。

事務局　本当におっしゃるとおりで、ＰＲをしっかりやっていくということを私どもも考えています。やはり、既存の外国語科とは違うんだというところをしっかり見せる必要があると考えていて、先ほどの学科の話とも絡みますが、外国語を学びたい、外国語が好き、外国のことを知りたいという中学生がいたとして、その中学生たちが外国語科を選ぶのか国際教養科を選ぶのかというのは、我々にとっては勝負だと思っています。この近隣ですと、春日部女子、越谷南、草加南、南稜、蕨、大宮光陵と、比較的外国語科やコースが多いエリアです。秩父・皆野新校も同じような学科を設置しますが、周りには外国語の学科がなく初めてできるのですが、ここは、そういう意味ではライバル関係にある学校が多いので、その違いをしっかり明確に打ち出していきたい、委員からの御意見を踏まえて、しっかり取り組んでいきたいと思います。

依田委員長　はい。それでは、資料に戻りたいと思います。５ページの下の部分、８対象校における教育活動、９ 教育環境の整備、６ページにいって 10 付随する事項まであります。この部分について、委員の皆様、いかがでしょうか。

関根副委員長　７ 開校準備について、一つだけよろしいでしょうか。来年度からということですが、参考までに、設置校側だから聞くというわけではないですけれども、新校の校名については、岩槻北陵高校との統合を踏まえて検討ということですが、飯能新校や児玉新校のように、名前自体がそのまま残って新校となった場合、校歌や校章、制服といったものは、実際にどういうふうになったのか、参考までにお伺いできればと思います。

事務局　第１期のときの状況ですが、校名については、もちろんアイデアを募集して複数の案が出てくる中で検討して、たまたま児玉高校、飯能高校という名前に落ち着いたわけですが、そのことを踏まえて、校歌は変える必要がないとか制服もそのままでということにはなりませんでした。新しい出発ということで、実際の実務としてはまず制服の選定を大分早い段階から始めました。それから、校歌についてはどちらの学校も現在検討中です。新しい学校が開いたにもかかわらず検討中とはどういうことかと思われるかもしれませんが、第１期の２校は変則的な統合の仕方をしています。岩槻新校などについては、岩槻北陵高校は既に募集を停止しているので、この後学年がだんだん少なくなっていって、最後に生徒全員が卒業すると岩槻北陵高校は校舎を閉じることになります。そのタイミングで新校が開くので、令和８年度できっかりと前の体制と新しい体制の違いが出るのですが、第１期の２校はどちらも、前の学校で入学した生徒が現在も残っています。ですので、当面の間は併唱するということで、児玉新校の場合は児玉高校の校歌と児玉白楊高校の校歌を併唱することを校内では決めています。新しい児玉高校としての卒業生が今度出るので、それに合わせて現在校歌を検討しているという状況です。飯能新校については、かつての飯能南高校が今は飯能高校南校舎として残っています。そこにも同じようにまだ在校生がいるので、まだ新しい校歌を制定せずに、それぞれ校舎ごとに違う校歌を歌っていて、両方の生徒が集まったときには併唱するという流れを取っています。ですので、参考にならないかもしれませんが、基本は検討していただいて、そのままいくという選択肢もあります。もちろん新しいものにしていくという選択肢もあります。その辺りは校名の議論をしながら考えていただくことになるかと思います。

依田委員長　それでは、他にいかがでしょうか。はい。手島委員、お願いします。

手島委員　９と 10 についてそれぞれあります。９ 教育環境の整備のところですが、後半に、施設・設備の整備についても必要な予算の確保に努めるとあります。この必要な予算の確保というのは事務方の本分であって、事務方の仕事だと思います。基本計画にこういう言葉を使うのかなという気持ちが少しありましたので、ここは、教職員の人事等を検討するくらいで終わらせておいて、予算の確保というのは当然、付きまとうものだと思うので、あえて計画で言わなくても良いのではないかというのが一つです。10 付随する事項については、基本計画は新校の開設から準備から

将来にわたってのことですが、付随する事項については、財産とか任意の団体とか物品など後始末的なことが書かれているので、果たしてこれが新校の基本計画に付随する事項なのかという感じがしました。⑴の跡地の利活用について、財産的には知事部局にわたっているのではないか思います。それをこの計画の中で触れてしまって良いのか、さいたま市と協議しと具体的に触れてしまって良いのか、と思いますので、言わなくても良いのではないかと思います。⑵の同窓会と後援会についても、我々は校長先生から万全のサポートをいただきながらなんとか運営していますが、あくまでも形式は任意の団体ですので、当然、それぞれの団体が自分たちで考えることだと思いますので、言わずもがなではないかという気がしました。⑶についても、もっともだなとも思いますが、付随する事項で言わなくても当然このようなことになるのではないかと思いますので、10　付随する事項そのものが、この計画に果たして付随しているのだろうかという疑問がありました。

依田委員長　はい。それでは、今、いただいた御意見について、一つ一つ考え方を聞いていきたいと思います。まず、教職員の人事等を検討するとともにの後、施設・設備の整備についても必要な予算の確保に努めるとある点についてです。これは事務局の仕事であって、この計画に載せる必要はないのではないかということですが、事務局からいかがでしょうか。

事務局　ごもっともな御指摘だと思います。確かに、私どもの考えをここに載せているようなことがあって、本当に新校の立ち上げに必要なのかと言われてしまえばそうなのですが、ただその一方で、二つの学校を統合して、岩槻新校の場合で言うと岩槻高校の敷地、建物、施設を活用して整備を行いますと言ったときに、ちゃんとお金をかけてくれるんだろうかといった期待のような、不安も含めてですが、統合は良いがこのままなのかといった心配の声が、割とあります。それに応えるためには、予算のことなので、はっきりこれくらいの規模でやりますとはもちろん言えないわけですが、ただ、全く考えていないわけではありませんと。必要な予算措置は、予算が確保できればそれによって、この新しい学校の特長を最大限発揮できるよう施設・設備については整備したいんですという、埼玉県教育委員会側の気持ちを出しているという形になります。

依田委員長　はい。他の委員から、この部分について御意見はありますでしょうか。準備委員会として御意見が強ければ、事務局の方も、そういうことならどうするかということはあるかと思いますが。とりあえずこの部分について、今の説明でいかがでしょうか。

手島委員　少し気になっただけなので、そういった思いがあるのであれば。

依田委員長　よろしいでしょうか。

手島委員　ただ、余りこういった、予算のことに触れるのかなという思いはあります。

依田委員長　例えば、施設・設備の整備に努めるとして、予算という言葉を外してはいかがでしょうか。事務局としてはいかがでしょうか。

事務局　おっしゃっているところはそうかとは思いますが、ただ、これまでのいきいきの再編整備の時代も、第１期もそうですし、それから今回の六つの学校の基本計

画案を今検討しているわけですが、共通で組み込ませていただいておりまして、こういうふうに書くことで、いろいろな方が腑に落ちると言いますか、中には、それは書き過ぎではないか、それはおかしいのではないかという御意見もあるのかなと改めて今日思いましたが、その一方で、この記載がないと、どうなっているんだという声もあるのかなと感じています。ですので、今のところ６校共通で記載しております。

依田委員長　手島委員、いかがでしょうか。

手島委員　分かりました。

依田委員長　恐縮です。それでは、10　付随する事項の⑴の部分、新校になった時点では、財産の管理については教育委員会の所管ではなくなっているのにこういったところに書いて大丈夫なのかという趣旨だったかと思います。これについて、事務局、いかがでしょうか。

事務局　こちらも蛇足みたいな記載なのかもしれませんが、この岩槻新校の開設を考えたときに、これまでもさいたま市とは、その後の利活用も含めて、協議しながらやっていきたいですねということで話し合いながらきている経緯がございますので、その旨をここでは表現しているということです。通常の万人向けに書いているわけですが、この部分は、当該のさいたま市をかなり慮って書いている表現になっております。その一方でこのように書いておくことで、県が勝手にいろいろな利活用の検討を進めてしまうのではなくというところが表れると考えているところです。これも６校共通です。

依田委員長　確認ですが、こういうふうに書いて、責任を負えるのかどうなのかという趣旨が、手島委員の御意見の中にはあったかと思いますが。

事務局　当該の市町にも、こういう御説明をさせていただいているので、大丈夫だと考えております。

依田委員長　手島委員、御安心いただければと思います。

手島委員　普通財産ですから、これは知事部局の管轄なのかなと思ったところです。

依田委員長　はい。とりあえずは責任をしっかりと負っていくということで、承知しました。⑵、⑶、これも要は、県の教育委員会で決定するような話でもなくて、そもそも任意団体それぞれの問題なので、ここに当然のことをあえて書く必要があるのかないのかという趣旨かと思います。事務局、いかがですか。

事務局　その御指摘もごもっともだと思っております。これも繰り返しの御説明になってしまいますが、やはりこれを書いておかないと、同窓会はどうするんですかとか後援会はどうなりますかといった声を、これまでも、例えば地域の方を集めた説明会などでも同様の質問を受けてきております。もちろん私たちとしてはその場で、それぞれの任意団体でお考えいただきます、物品等については対象校同士でいろいろ取扱いを考えていただきますとお話ししておりますが、改めてここで記載させていただいて、そういうところで不安を抱いている方に、県の考え方を示すということです。本当に、そういう意味では県が直接やるわけではないということは重々承知した上で、あえてこのような表現で書かせていただいております。これも６校共

通になっております。

依田委員長　はい。ありがとうございます。その他、８、９、10 の部分について、御意見等ございますでしょうか。よろしいでしょうか。それでは、全体を通して、これまでの議論を振り返っていただいて、いかがでしょうか。まだ御発言いただいていない委員がいらっしゃいますが、池田委員、何かございますか。

池田委員　大丈夫です。

依田委員長　はい。石井委員はいかがでしょうか。

石井委員　一つだけ。話が戻ってしまうのですが、国際教養科ということで先ほど議論があったと思いますが、岩槻新校が新しく開校するに当たって、国際教養科の意義と言いますか、教育内容も含めてどうなっていくのかということが、すごく興味がある反面、少し心配な部分もあります。先ほどの話にあった、英語が学べる学科ではなくて、例えば、理科とか数学が好きなんだけれども、英語を使って理科とか数学を学びたいんだという、いわゆるリベラルアーツですよね。教養的な部分を学べるような教育活動に持っていけると、その学科がある意味があるのですが、その辺りができないと、普通科に生徒を取られてしまうのかなという懸念もあります。その辺り、今後検討していただくと良いと思いました。

依田委員長　事務局からいかがですか。

事務局　まさに教育活動を具体的に検討していく来年度、どういった授業を用意するのか、その前提としては、どんなふうにこの新校の、例えば国際教養科の生徒たちあるいは普通科の生徒たちを育成していくのかというところにつながっていくと思いますので、教育課程を組み上げていく中で、今のようなところもしっかりと意識して、とにかく特長、特色をこの地域にしっかりと訴えていけるような、国際色豊かな学校になるように努めてまいりたいと思います。

依田委員長　よろしいでしょうか。では、両副委員長からお願いします。

長谷川副委員長　いろいろな御意見をいただきまして、どうもありがとうございました。それから、事務局におかれてはいろいろまとめていただきまして、ありがとうございます。岩槻北陵高校の良いところをできるだけ落とし込んでいただいたと思いますが、その実践に向けて、引き続きよろしくお願いしたいと思います。本当にいろいろありがとうございました。

関根副委員長　設置校の校長として、一言述べさせていただきます。まず、先ほど長谷川副委員長からもありましたが、岩槻北陵高校のレガシーを、教育課程も含めていかに落とし込むか。基本計画の中に落とし込んでいただいてはおりますが、それを実際に来年度からの新校開設委員会の方で、どういうところに残していくのか、いろいろ生徒指導や進路指導の面で良いところを残していくということが、やはり新校に入ったときにちゃんと分かるような形にしたいと思います。それが一つです。あと、今回は新校基本計画という新校の大枠ですが、国際教養科という科の基本計画のようなものも、本来はしっかりと考えていかなければならない部分もありますので、もちろんカリキュラムに落とし込むとかということもありますが、私も今日の各委員からの御意見をいただいて、そういうことか、なるほどなと思うところが

たくさんありました。こういったところは具体的に生かしていかなければならないということで、私自身、本日はすごく学びがありました。単純に国際文化科から国際教養科に名前が変わっただけでは特色化になりません。ましてや生徒募集で、もし新校になって1.0倍を超えないような状況になってしまった場合、今までやってきたことがどうなんだろうということになりますので、すごく責任を感じていますし、緊張感を持ちました。岩槻北陵高校の長谷川副委員長の御専門は英語ですし、岩槻北陵高校の教員からもいろいろな意見をもらいながら、改めて新校のことを具体的に考えていくのは、これからが本番かなと思っております。一方で、この基本計画案が本日固まりましたことに関しては、本当に胸をなでおろしております。皆様、本当にありがとうございました。

依田委員長　はい。ありがとうございました。それでは、以上で協議を終了させていただきたいと思います。冒頭の挨拶で申し上げたとおり、今回、当初予定の３回目の委員会が終了したところでございます。これをもって、新校基本計画案について整理させていただき、策定に向けた事務を進めてまいりたいと考えております。皆様には、改めて感謝を申し上げます。ありがとうございました。皆様方には、引き続き来年度、校名などにつきまして、また御意見を頂戴したいと思いますので、今後も引き続きよろしくお願いいたします。